

< 2016 年 5 月 >

古賀 順子

ジヴェルニーとカイユボット

カルヴァリオの丘で十字架に死したキリストは、三日の後に復活します。目に見える姿で、最後の言葉を残すため、使徒たちの前に現れます。その復活から四十日後、地上を去り、永遠の命として昇天する「キリスト昇天祭」、今年は5月5日です。復活祭と同じく、移動祭日のため、4月30日から6月3日の間になります。

キリスト昇天祭の日、フランス全土が初夏の陽射しに恵まれました。ジヴェルニーのモネの庭も、快晴の高い空に、眩しいばかりの光を浴びる木々や草花が、生き生きと咲いていました。冬場はひっそりとした小さな村ですが、狭いメイン通りは、開園時から多くの人で溢れていました。3月25日から11月1日まで(9:30-18:00 開園時間)、花の季節だけに訪れることができます。「睡蓮」「ルーアン大聖堂」などの連作が描かれたアトリエと住居、そして四十年の歳月をかけて育てられた木々、草花が美しく再現されている場所です。七ヶ月間に咲く花の種類は様々ですが、今回は、チューリップが一際華やかでした。真っ赤なダリア、紫色のアガパンサス、色とりどりのパンジー、可憐なケシの花、立派なシャクヤク。桜は満開を過ぎ、バラはまだ咲いていませんでした。睡蓮の池には、青々とした竹と垂れ柳が鏡の水面に映り、緑色の日本橋の藤棚は二分咲き。睡蓮の花には早すぎたようですが、カエルの啼き声が微笑ましく、写真を撮ったり、座って風景を眺めたり、ゆったりとしたひと時です。

睡蓮の池は、モネの小宇宙です。水面に映る空、雲、木々を心静かに眺めていると、上下左右や360度の境界が消え去っていくかのようです。自分自身と向かい合い、吹く風を感じながら目の前に見える自然を通して、人の命も宇宙と呼応していると感じます。下草からバラのアーチまでを植物、花、木々で構成する「造園」は、自然を通して宇宙と繋がる空間です。

モネにとってジヴェルニーの庭が無くてはならない

存在であったように、もう一人の印象派ギュスターヴ・カイユボット(Gustave Caillebotte 1848-1894)にとっても、「園芸」は創作活動の根底を支えています。これまでは、作品よりもモネや印象派の画家たちのメセナと位置づけられていたカイユボットですが、完璧主義で、写真のような、異なる視線を持つ印象派として、再評価されています。ジヴェルニー印象派美術館では、園芸家としての側面を中心に、約80点の作品が展示されています(展示期間は7月3日まで)。パリ生まれで、オスマン大通りのアパルトマンに住んだ時代から、母親の遺産として引き継いだイエールの屋敷、その後ジェンヌヴィリエに移り住むまで、年代に沿った作品展示です。

モネのジヴェルニーは、カイユボットのイエールとプチ・ジェンヌヴィリエに相当します。イエール(Yerres)は、パリから南東20km、人口3万人に満たない小さな町ですが、19世紀、官僚や裕福な社会階層の別荘や住まいが建った場所でした。ナポレオン3世時代、軍との商売で大成功をした家系に生まれたカイユボットは、絵画と園芸だけに専念することができました。最も有名な作品は、オルセー美術館所蔵「床板を削る人」(1875年作)ですが、華やかでし時代のイエール川で水遊びを楽しむ人々、水辺の風景などを多く描いています。腐葉土を大量に購入し、キャベツなどの野菜栽培をし、温室を作って、種や苗を取り寄せ、ランなどの珍しい品種を栽培するなど、植物の特徴を捉えた作品もあります。栽培に適した品種、種まきの時期、土壌や肥料、栽培構成などについて、モネとカイユボットが交換していた園芸書簡も展示されています。園芸に生涯を捧げ、1894年、ジェンヌヴィリエ(Gennevilliers)の庭で作業中、45歳の若さで亡くなります。

種を蒔き、芽が出て、花を咲かせる。苗を植え、育てた植物が実を結ぶ。園芸は、命のサイクルが見える空間です。果実は人の糧となり、草花は心の安らぎとなります。園芸は、人の生活空間、さらには都市空間の中で、芸術と変わらぬ大切な価値を持つことに、何ら不思議はありません。